

交流・文化施設等整備検討委員会概要

1	会議名	交流・文化施設等整備検討委員会 第3回専門委員会
2	日時	平成20年12月8日(月) 午後5時30分から7時45分まで
3	会場	株東京国際フォーラム G509会議室
4	出席者	日端委員長、美山副委員長、土本委員、伊藤委員、佐田委員、津村委員、関田委員、太田委員、滝澤委員、
5	市側出席者	石黒副市長、大澤政策企画局長、小菅教育次長、中部文化振興課長、伊藤交流・文化施設建設準備室長、若林係長、室賀係長、徳田主任
6	運営支援業務受託者	室賀建築設計事務所 室賀欣一氏
7	公開・非公開等の別	公開・一部公開・非公開
8	傍聴者0人	記者0人
9	会議概要作成年月日	平成20年12月9日

協議事項等

- 1 開会(大澤政策企画局長)
- 2 副市長あいさつ
先のホール部会では、市の考え方を示すよう意見をいただいた。本日、不十分ではあるが一案をお示しする。また本専門委員会では非常に重要な議論をいただいております。会議の回数を増やすことができると考えている。様々な点で忌憚のない意見をいただきたい。
- 3 委員長あいさつ
前回、市の方で考え方をまとめるよう意見が出され、本日はその準備がされている。早速議題に入りたい。
- 4 報告事項
(1) ホール部会の検討結果について
事務局:(資料1の説明)
委員長:何かご意見は。
委員:(なし)
委員長:では議事に移りたい。
- 5 議事
(1) 交流・文化施設等の検討について
事務局:(資料2の説明) なお、新施設では、維持管理費だけで2億5千万円程度想定しており、施設の概要としては、大ホールと300席程度の小ホールを持ち、美術館は別棟ではないが建物内で別れている形式。大ホールの席数は1,500~1,700席程度で、客席と舞台との近距離を保ちながら、客席数可変装置で最少1,000席程度にしたい。美術館では、郷土作家の作品について、各作家で独立させるのではなく、年間でローテーションをさせながら常設展示を行う。なお、これらは確定事項ではなく、また本日結論を出すということでもないため、次回の議論につながるようご意見をいただきたい。
委員長:約2億5千万円の維持管理費の中には修繕費は入っているか。
事務局:単年度の修繕費は入っているが、大規模な修繕費は入っていない。今後、数十年という長期の経費シミュレーションを作成する際には、当然これら大規模修繕費を加味したものとなるが、現段階では単年度のものをお示しした。市として、例えば年間予算規模の何%くらいは文化にかける、という考え方も必要と考えている。なお、先程話した2億5千万円の中には人件費は入っていない。人員の配置や人数については今後の検討課題。
委員長:現上田市民会館の運営費はどの程度か。
事務局:人件費も含め約5千万円。新施設では自主事業を行っていくが、現実的な集客を考えれば、月に一度程度の開催が妥当ではないか。それでも文化のためには自主事業を行いたい。
委員:管理についてはどのように考えているか。最初の間だけ直営か、最初から指定管理か。
事務局:直営で行うとしても開館後2~3年程度。その後、指定管理料を算定し管理者を公募する。但し、直営の間は市の職員が管理を行うわけであり、この点は非常に危険でもある。そうした意味では、管理料ではなく、公開プレゼンテーションによって管理者を決定し、最初

から指定管理とする方法もある。

委員：事業費は事業を委託する費用か、それとも補助金か。

事務局：これまでの例では、全体事業費から入場料収入を差引いた分を、実行委員会への補助金というような形で計上してきた。

委員：補助金として年間にいくら出せるのかを明示すべき。自主事業それぞれを委託すると、極端な話「チケットが売れなくても大丈夫」ということになってしまうため、補助金の形が良い。また先程、直営で市の職員が管理することは危険と話されていたが、直営だが上層部は全て専門職という例もあり、この場合でも、専門家達が数年間の長期のビジョンを立てるためには、補助金の形が良い。

事務局：美術館での事業費も含め、具体的にどの程度の金額であれば市民の理解をいただけるか、これはもう少し検討が必要。

委員：自主事業費はホールの規模や事業の内容によって大きく変わる。専門家は事業費を提示されればその中で事業を組み立てていくため、そこを明確にした方が良い。もちろん金額については、市民の皆さんの理解が必須ではあるが。

委員：具体的な事業の組み立てとして、予算が少ない場合は、通常はフルバンドでの公演だが出演者を減らしてもらい、会館の使用料を無料とする、など公演料を減額する交渉ができる。ただし、これらはスタッフにノウハウが必要であり、その選考は非常に重要。ホールは船と同じで、置いておくだけで莫大な費用がかかる。であれば、空いていてお金が出て行くよりも、一日でも多く使用され、お金が入ってくるように考えた方が良い。

事務局：年間12件という提案ではあるが、次回はもう少し精密に積み上げて皆さんに提示したい。また、上田市が文化事業として投入できる金額について、お示ししなければ議論が進まないと思うが、今日のところは席数について、1階席が1,000席、2階席が500席、あるいはオーケストラピットの使用を勘案して1,200席と500席で想定しており、これらの考え方が検討に値するのかどうか、ご意見をいただきたい。

委員：基本的な方向性は賛成。世界的なオペラやバレエやオーケストラが、たとえ年に1回でも上田でできるということは、今後数十年先を考えた時に必要。こうしたホールができれば、プロモーターらが公演を企画する。稼働率は上がり、一級の芸術がこのホールに集まる。自主事業にお金を出さなくても外から集まってくるということ。適正な席数ということになると、オーケストラピットを使用してもチケットが高くなりすぎない席数として、現在の議論の中では1,700席が良い。自主事業については、公演の内容によって経費が何百万も異なるため、本数ではなく投じられる費用から事業を組み立てるべき。

委員：共催事業は自分たちだけでコントロールできず、スタッフの育成にもつながらないため、開館して3~4年経過してから企画されることが多い。始めから共催を行うとホールが崩壊してしまう危険性がある。

副委員長：『鑑賞』の部分は今のような議論が良いが、『創作』、『育成』、『交流』については、誰がどのように行っていくのか。催しが無い時にも、市民が「自分たちのホール・美術館」と思える必要があり、施設が市民の日常に近づくことで、『鑑賞』者にもなる。スタッフは市外から採用するのではなく、地域に眠っている力を開かせる。施設を花瓶だとすれば、切花を持って生けるだけではなく、上田の土に根を張って出てきた花が必要。

事務局：「上田市のシンボル」は形の上でのシンボルというだけではなく、『創作』、『育成』、『交流』の意味を含めた上でのシンボルでなくてはならない。

委員：交流施設について、市としてはどのようなイメージを持っているか。

事務局：文化的な側面だけでなく、世代間、地域間、ホール・美術という分野を越えた交流を生み出してまいりたい。また、キーワードとしては、「障がい者の交流」や「福祉」もある。

副委員長：この「福祉」の部分は指定管理の仕様書に明確に表現することが必要。また「福祉」にハードが十分に対応していなければ意味が無い。例えば、ボランティアに催しのお手伝いをお願いしたとしても、そのためのスタッフルームがなければ成立しない。活動をイメージしながら施設計画に反映させていくことが必要。

事務局：上田市は子育てに関する評価が高まっており、子どもを含めた世代間交流の視点も必要。

委員：私の会社では、20年間料金を取らなかったコンサートがある。これは、無料なら家族でやってくるが、1,000円ならお年寄り子どもが留守番になる。こちらとしてはスポンサ

ー集めなど苦しい面もあったが、最近はおんどのお客さんが家族全員で来てくれるようになり、子どもやお年寄りを含めた世代間交流は実現可能だと感じた。それから、『鑑賞』よりも、『創作』、『育成』、『交流』の3つの方がお金のかかるところであり、この部分に十分な予算を確保し、『鑑賞』部分はいかに予算を絞るか、このように考えた方がよい。

委員：美術館としてホールが空いているときに行う事業がたくさんある。例えば、木の玉のボールで木の温もりを体感してもらうなど、体験型の施設で、日常的に子ども達が交流することができる。また、県外の美術館で10年以上やっている企画で、親子が自由に粘土工作をし、自由に絵を描くというワークショップ(体験型講座)もある。作品の評価よりも、創る喜びを啓発させるような活動が大切。上田は県下でも、知的障がいの方のエイブルアートが盛んな地域であり、それらの企画展を、入場料はとらずにあくまで発表の場として常に発信していく。これは大きな理念で言えば、山本鼎の自由画運動の精神にもつながる。

事務局：施設の目的として「人にやさしい」というキーワードが必要と感じる。

委員：別のキーワードとして「医療」という面はどうか。アートセラピーなどによって「福祉」と「アート」と「医療」をつなげる。『交流』、『育成』の面では、美術・音楽系の大学から合宿先として誘致し、その成果を公開すれば、学生と上田の子ども達との交流も生まれる。ホールの用途について、多目的という考え方もあるが、「これはやらない、できなくてもよい」という絞り込みも必要ではないか。

委員：最近では院内学級という、病院に入院している子ども達のための学校がある。私達も月に一度美術教室を行っているが、子どもの創作だけでなく、保護者の皆さんの「癒し」にもつながることを感じている。新しい美術館での事業を、このように、例えば市の産院へ出張して行くことも考えられる。そしてこれは、ホールでも同様の事業が成立する。

委員：ホールや美術館に来たくても来られない人々が大勢おり、かれらに芸術を届けるためのアウトリーチ事業が10年ほど前から急速に広がっている。またこれは、『鑑賞』者の増加に大きく関わり、専門的なスタッフの配置が非常に重要な要素となる。「教育」、「医療」、「福祉」、「文化」、この4つの要素は、どんな大企業でも持ち得ない。行政のみが全て持っている。これらの専門家が集まり連携した事業ができれば、日本で最初の施設になる。

委員：「福祉」を軸にアートをいかに発信していくかが重要となる。可能であればアートセラピストの配置や子育て支援センター的な活動も良いのではないか。

事務局：今回の施設は立地条件に恵まれているが、商業施設のみに人が集まるのではないかとという不安があるがどうか。

副委員長：常に人の流れを生むような仕組みが必要。アメリカのある施設には、地域の様々な文化団体のオフィスが入っている。いかに新たな賑わいを創るか、工夫をする必要がある。

委員：いかに「毎日来なくては仕方がない施設」を造るかが重要。ニューヨークでは30年程前、古いビルを改装し家賃1ドルでアーティストを募集したところ世界中から集まり、その街が変わってしまったという例がある。

事務局：商業施設がシネマコンプレックスを断念したが、年間100本近い口ケがあり「映画のまち上田」と呼ばれる中で、こちらの施設では映画の公演が必要と思うがどうか。

委員長：商業施設側とお互いに刺激しあう連携関係を築くためには、JT跡地内の道路整備を含めて今から検討を行っていく必要がある。

事務局：跡地内中央の道路によって商業地区と公共地区が分断される。連携のためには歩道の幅などについても検討が必要。商業地区の整備計画が進んできているため、そのための検討も必要である。

委員長：席数が1,500~1,700で提案されているが、200席の差で維持費に大きな差が生じるか。

委員：席数が多いほど維持費はかかるが、使用料にそれ以上の大きな差はつけられない。

委員長：1,500席と1,700席ではどちらがいいのか。興行面では1,700席ということになるが、費用が大きく異なるのであれば、1,500席が良いということになる。

事務局：なお建設費については、1,500席と1,700席では面積が約1,000㎡異なり、㎡あたりの平均建設費約60万円を乗じると約6億円の差ということになる。

委員：2階席を想定されていると思うが、扇形のワンフロアホールも検討されたい。

委員：中ホール機能を持たせる意味で客席数可変装置は重要だが、維持経費はどの程度か。

委員：非常に大きい金額となる。ワンフロアのホールであれば尚更で、これは、非常に高さの

ある壁で仕切ることとなり、これを下ろせば、音響を含め何もかもが変わってしまう。

委員：シドニーのあるホールでは、2階席にカーテンを閉めるだけで客席数を変えている。お客さんが後ろを見る事は無いため、それだけで十分という考え方。ボタン一つで壁が下りてきて、さらに音響まで変わるとなれば、非常に多額の経費がかかるものと思われる。また、これまで多くのホールを見てきたが、1階席と2階席の割合は8：2程度。1階席が1,200席なら2階席は400席が限界ではないか。

委員：以前勤めていたホールは約1,500席であったが、興行にはやや規模が小さく、市民利用には大きすぎる。市民からは2階席(約450席)を閉じて欲しい旨の要望が出されていたが、予算の面から対応できなかった。

委員：市民利用としては1,000席が限界。興行も成立し、市民利用も可能、かつ演劇用に舞台との距離を近くする。このためには客席可変装置が必要であり、中ホールを別に作ることを考えれば費用負担も少ない。なお、ワンフロアで1,600~1,700席にすれば、舞台が遠過ぎて演劇の公演が難しくなるため、2階席は必要。

事務局：ホール内の天井高や幅など、図を描いてみる必要がある。

委員：これはある意味では簡単で、客席から舞台を見た時の、舞台の倍の高さがあればよい。

委員：千数百席のホールは客席側の天井高も相当な高さとなり、非常に大きな空間となる。

事務局：上田の気候を考えれば、暖房費も大きくなる。

委員：空調の技術は今非常に進んでおり、過度に心配する必要はないと感じる。

委員：今はエコの時代であることから、太陽光発電などを利用すれば経費が節減できる。

委員：ホールの名称やネーミングライツについては何か考えはあるか。

事務局：現在まだそこまで検討が至っていない状況。今後の予定について、できればもう少し長期間にわたって議論をいただきたく、検討報告までに専門委員会をあと3回程度はお願いしたい。当初のお話とは変わってしまうが、ご理解いただきたい。

委員長：事務局から改めて依頼があると思う。今日は市の方からも具体的な提案がなされ、重要な議論が行われた。今後は交流施設についても「福祉」や「子ども」をキーワードにしなが、具体的なイメージを示していくことが必要。そのほか、人材の配置や、商業施設との交渉など、様々な課題があるが、時間も過ぎているので今日はここで終わりにしたい。

委員：ホールの席数については引き続き検討していくことと思うが、例えば、ホールや美術館のバックヤードについて、スタッフについてなど、これらの詳細かつ具体的な議論はいつ行えばよいのか。テーマと時間を決めて一つずつ決めていくことも必要。

委員：Jリーグ立上げの際、選手は揃っているが審判がおらず育てる期間もない、という状況があった。今回の場合は、開館まであと4年あるとすれば、今からスタッフをどこかの会館に出向させ、育成を行っていくことも必要。営業や舞台周りのノウハウも習得でき、外部の職員を採用する必要もなくなる。ソフト面も、今から企画していなければ間に合わない。

事務局：非常に重要な視点。専門職の採用について十分検討してまいりたい。

委員長：それでは、今後の進め方について事務局から説明されたい。

(2) 今後の進め方

事務局：(資料3の説明)

委員長：中間報告は骨格的な部分を表現すれば良い。その部分は十分議論してきている。

委員：中間報告は理念の部分を中心にするのであれば、次回はその部分に的を絞って議論すべき。施設の内容については、方向性としてこういうものが必要、ということでのよいか。

事務局：理念の部分を中心に、例えば『鑑賞』についての具体的な内容、『創作』についての具体的な内容を表現するとともに、スタッフの問題、市が文化にどの程度お金をかけるか、これらの部分の表現が難しいが、次回1/20の専門委員会には一案作成してまいりたい。

(3) その他(なし)

6 閉会(石黒副市長)

時間を過ぎてしまいましたが、長時間ご議論いただき誠にありがとうございました。

* 会議概要は原則として公開します。会議終了後、1週間以内に行政改革推進室へ提出してください。

* 非公開及び一部非公開としたものについては、その理由を記載してください。